

B型肝炎ワクチン、1歳前までに定期接種可能に

気づかないうちに誰でもかかる危険性のあるB型肝炎。日本では110万人から140万人、約100人に1人が感染しているといわれます。多くは自分が感染していることさえ気づいていないといい、気づかぬうちに大切な家族に病気をうつしてしまふ危険も。そこで予防対策が重要！ もつとも有効な方法はワクチン接種です。乳幼児期の早い段階で接種可能になりました。B型肝炎は感染年齢が低いほど慢性化しやすいので、できるだけ早いワクチン接種で未来の大切な命を守りましょう。



B型肝炎は、B型肝炎ウイルス（以下HBV）が原因となって肝臓の働きを悪化させてしまう病気です。すでにウイルスを保持している人（キャリアー）の血液や体液を介してHBV感染して発症します。

HBVは、体外でも7日間くらいは感染性を持ち、その間に皮膚や粘膜に接触して感染を起こすこ

とがあります。その後30日間から180日間潜伏します（平均75日間）。

ほとんどは症状もなく、治療（ちゆ）します。しかし発病すると急性肝炎の症状が1カ月間ほど続き、「微熱」「食欲不振」「倦怠（けんたい）」「悪心」「嘔吐（おうと）」「腹痛」「褐色の尿」などの症状が出て、皮膚や

白目が黄色くなる「黄疸（おうだん）」症状などが重症になると、激症肝炎を引き起こして死に至る肝不全に進展することがあります。また一部は慢性肝炎として肝臓に慢性的に感染を起こし、のちに肝硬変や肝がん進展します。

2002（平成14）年、佐賀県内の保育所で25人の集団感染がありました。2009（同21）年には、お

じいちゃんから孫にHBV感染し、さらに父親が発症する家族内感染が起きました。

成人時に感染すると5%未満が慢性化します。しかし1歳以下で感染すると80-90%、6歳未満では30-50%が慢性化してしまいます。治療はウイルスの増殖を抑える薬剤やインターフェロンがありますが、ウイルスを完全に排除することはできません。

そのため厚生労働省では10月1日から、出生後から生後12カ月の満1歳前までを対象年齢に（標準的には生後2カ月から）、B型肝炎ワクチンの定期接種を実施することになりました。

B型肝炎ワクチンは最も安全なワクチンの一つといわれています。生後2カ月から3回接種した場合、防御効果は約20年間続き、おそらく一生持続すると考えられています。

ワクチン接種によって抗体を獲得できる確率は、40歳未満で95%と高く、40歳から60歳で90%、60歳以上

になると65-70%に低下します。感染初期（7日から14日）であればB型肝炎免疫グロブリンとワクチンの併用で感染予防効果が期待できます。

副作用は5%以下の確率で、発熱、発疹（ほっしん）、接種部位の腫（は）れ、痛み、硬結、吐き気、下痢、食欲不振、倦怠感などが見られますが、数日で回復します。

このようにワクチンで予防できる病気はいくつかあり、徐々に定期接種化が増えて注射の数も増えていきます。子ども達はみんな注射が嫌いなので、注射をする医者は嫌われるのですが、重い後遺症や死に至るような病気を一つでも多く予防でき、元気に過ごせるように願っているのです。

町立診療所では、特定健診の受診時に肝炎ウイルス検査も実施しています。

町立診療所副所長

古川 倫也